

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 嘉戎語の基本構造

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-16 キーワード: ギャロン語   チベット語   チベット・ビルマ語族 作成者: 長野, 泰彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00004069">https://doi.org/10.15021/00004069</a>

## 嘉戎語の基本構造

長野 泰彦\*

### An Outline of Gyarong Grammar

Yasuhiko Nagano

ギャロン語はチベット・ビルマ語族の歴史を考える上で重要な言語であるが、この言語に関する記述資料は少ない。小稿はその状況を少しでも改善するための試みであり、構想しているレファレンスグラマーを著すための第一歩である。特に、動詞句とそこに働く形態統辞論的メカニズムに記述の重点をおいた。

This paper is designed to outline Gyarong grammar. Many scholars have paid attention to this language because some lexical items are very close or sometimes identical to those of Written Tibetan (WT). Looking into its grammatical systems carefully, however, has led many to recognize that the language is far from WT and in fact rather closer to Proto-Tibeto-Burman (PTB) both in terms of phonological shapes and morpho-syntax. There have been only a limited number of grammatical descriptions of this important language, and this small paper is an attempt to improve the situation.

0 はじめに	2 形態論及び形態統辞論
1 音論	3 おわりに

\* 国立民族学博物館民族学研究開発センター

**Key Words** : Gyarong, Tibetan, Tibeto-Burman  
キーワード : ギャロン語, チベット語, チベット・ビルマ語族

## 0 はじめに

嘉戎語（チベット文語 [WT] rGyal rong; ギャロン）は中国四川省西北部に話されるチベット・ビルマ（TB）系の言語である。この言語は WT に極めて近い音形式を持ち、かつ、TB 祖語（PTB）の形態を保持するものとして古くから注目を集めてきた。

確かに嘉戎語には WT に近い、または、同一の音形式を持つ語彙があるが、そのほとんどが文化語彙であり、文語形式からの直接的借用と考えられる。一方、身体名称、用言などの基礎的語彙は、Benedict (1972) の再構する PTB の形式に直接比較し得る。したがって、語彙のレベルにおいて、嘉戎語をチベット語支に下位分類するのは妥当でない。

また、形態統辞論のレベルでは、接辞の体系はチンポー語、ラワン語、PTB に近い一方で、その代名詞化の体系は幾つかのヒマラヤ諸語に平行しており、下位分類について明確な仮説は立てられていない。ただ、嘉戎語の持つ代名詞化の極めて複雑な体系に関して言えば、ある学者たちが主張したような PTB からの直接の反映形式と考えるのは無理があり、むしろ後代の改新 (innovation) であることはほぼ確実と言える。嘉戎語は PTB の姿を探るために重要な言語であるが、その歴史的な位置づけは未詳と言わざるを得ない。

嘉戎語形態論・統辞論に関して、Wolfenden (1929) 以来、筆者 (1984) や林 (1993) を含む幾つかの業績があるが、文法全体を通観したレファランソグラマーはまだ発表されていない。小稿は嘉戎語を特徴づける接辞の記述を中心としつつ、形態統辞論全体を簡潔にまとめようとする試みの第一歩である。

### 0.1 分布

嘉戎語を母語とする人々は大部分が中国四川省阿壩藏族羌族自治州と甘孜藏族自治州に居住している。嘉戎は中国の少数民族として認知されておらず、藏（チベット）族として登録されているため、その正確な人口は分からない。約15万人と推定される。チベット族と異なり、嘉戎の人たちは嘉戎「族」ではないから、学校教育に嘉戎語が用いられることはない。このため、公の場所では中国語、家庭内では嘉戎語、というバイリンガリズムが一般的だが、若い世代ではリングフランカとして圧倒的な中国語が家庭内でも嘉戎語を駆逐しつつある。また、文化的にはチベット文化が支配的だっ

たため、60歳以上の人々はチベット語の読み書きがある程度でき、場所によってはチベット語による教育が行われているが、これを選択する若者は極めて少数になっている。

## 0.2 方言

伝統的には18の方言があるとされるが、これは12世紀以来清朝末期までこの地域が18の統治区画に分けられていたことによる。言語学的には北部、東部、西部の3つの方言を認めれば充分である。

北部方言は大藏 (WT da tshang) を中心とし、1万人を算える。西部方言は壤塘 (WT dzam thang) と丹巴 (WT bstan pa, dam pa) を含む地域で、5万人の話し手がいる。東部方言域は卓克基 (WT lcog rtse), 馬尔康 (WT bar khams), 梭磨 (WT so mang), 雜谷腦 (=Tshako, WT bkra shis gling), 理県 (WT lis rdzong), 小金川 (WT btsan lha), 大金川 (WT rab brtan), 黒水 (WT khro chu rdzong), 麻窩 (WT bha dbo) を含む広い範囲にわたる。約8万人がいる。

これらの方言分類は主として語頭の子音結合のあり方と動詞句内部での人称接辞のふるまいを基準としてなされているが、全ての方言資料が揃っているわけではないので、この分類はあくまでも仮のものである。この中で卓克基方言が最も保守的に接辞のセットを持っており、また、清朝初期以降政治の中心であったこともあって、標準嘉戎語とされている。筆者の調査もこの方言を軸に行ってきたので、以下の記述は特に断らない限り卓克基 (チョクツェー) 方言の記述と理解していただきたい。

# 1 音 論

## 1.1 子音要素は次のとおりである。

p	py	t	ʈ	ky	k	ʔ
ph	phy	th	ʈh	khy	kh	
b	by	d	ɖ	gy	g	
		ts		č		
		tsh		čh		
		dz		ǰ		

	s	š	h
	z	ž	ɦ
m	n	ñ	ń
	l	r	
	ɫ		
w	y		

音価として注意すべきものは以下のとおりである。

T-	そり舌音
Ky-	口蓋化した K-
	口蓋閉鎖音 [c-, j-] がこの異音として現れることがある。中国の言語学者の多くは [cç-, cçʰ-, jɟ-] として記述する。
ɦ	有声の h
ɫ	無声の l

この他に、鼻音化要素として /N/ を認める。これは閉鎖音と破擦音の前に立ってそれらを鼻音化する。また、末子音の位置に立って先行する母音を鼻音化する。

1.2 母音は /a, i, u, e, o, ə/ の6種である。/i/ は通常 [i], /e/ は [ɛ], /u/ は [u] として出現する。

1.3 声調はない。声調を認める学者もいるが、筆者の調査によれば、同音異義語であるか、音調を声調と考えているかのいずれかである。

1.4 音節構造は (C) C<sub>i</sub> (G) V (C<sub>f</sub>) (s) であり、括弧に括った部分はオプションである。(C) の位置に立ちうるのは p-, t-, k-, r-, l-, s-, š-, m- または N- である。この内、p-, t-, k-, s-, š- は有声の C<sub>i</sub> の前で有声化する。1.1に挙げた全ての子音 (ɦ- を除く) が C<sub>i</sub> に立ち得る。(G) は介音であり、-r-, -l-, -w-, -y- の4種である。C<sub>f</sub> は -p-, -t-, -k-, ʔ-, -č-, -s-, -ɦ-, -m-, -n-, -ń-, ñ-, -l-, -r-, -w-, -y-, -N のいずれかである。C<sub>f</sub> の後に立ち得るのは -s のみである。

## 2 形態論及び形態統辞論

嘉戎語の形態論と形態統辞論を特徴づけるのは生産性の高い接辞である。この接辞は様々の文法機能を規定する。小稿で記述するのは主としてこの接辞とその働きである。

### 2.1 名詞

多くの名詞は接辞 *tə-* によって接頭される。*tə-rmi* 「人」, *tə-yak* 「手」など。*tə-* は名詞の前に置かれるとき、「強調されない1」を示すが、分類詞の前に立つと、「ひとつの～」を表す。例えば, *tə-pa* 「1年」, *tə-rgi* 「ひとつの」, *tə-lpek* 「1片の」など。*tə-rgi* は特に「ひとつの, 1箇の」を強調するとき用いられる。例えば, *tə-pak* は「豚」で特に数を指定しない限り「1匹の豚」である。しかし、「1匹の」豚と言いたい場合, *pak tə-rgi* という表現になる。なお、「3匹の豚」は *tə-pak kə-sam* である。

2.1.1 名詞と *qualifier* との統語論的關係は次のとおりである。

「この傘」	<i>štə wə-dek</i> (これ の-傘)
「2つの部屋」	<i>kho kə-ñes</i> (部屋 2つ)
「これらの4つのペン」	<i>štə wə-sñekə kə-wdi</i> (これ の-ペン 4つ)
「大きなテント」	<i>sgar ku-de</i> (テント 大きい)
「この美味しい粥」	<i>štə wə-pepe kə-mem</i> (これ の-粥 美味しい)
「3人のかわいい女の子」	<i>tə-mi kə-snaña kə-sam</i> (娘 かわいい 3つ)
「これらの3本の黒い鉛筆」	<i>štə wə-žasñu kə-na kə-sam</i> (これ の-鉛筆 黒い 3つ)

### 2.1.2 名詞化標識

*?a-* は方向接辞についてそれらを名詞化する。*ta-* と *na-* は「上へ」「下へ」を示す方向接辞であるが, *?a-* がついた *?a-ta* と *?a-na* は「上 (の方向)」「下 (の方向)」を表す。

*to-* が動詞の不定形に接頭すると, その動詞が示す意味上の被動作者を表す。例えば, *ka-žu* 「告訴する」に対し, *to-ka-žu* は「被告人」である。

よく似た接辞として *sa-* がある。*sa-gyup* 「寝室」 vs. *ka-gyup* 「眠る」, *sa-top* 「ハ

ンマー」 vs. ka-top 「叩く」のように、「何かをする場所または道具」を表す。

### 2.1.3 性と数の標識

名詞の性を表す文法的範疇はない。それが表す自然の性別は -pho (男, オス) と -mo (女, メス) によって示される。また, 名詞の数は -Njas (双数) と -ñe (複数) によってマークされる。

### 2.1.4 関係節

関係節の一般的構造は VPnon-final+wə-名詞, である。VPnon-final は (アスペクト標識/方向接辞) -V<sub>inf.</sub> -人称接辞である。アスペクト標識と方向接辞については 2.4.2 と 2.4.3 を, 人称接辞については 2.4.5 を参照されたい。V<sub>inf.</sub> は ka- 語根である。

ta-pu ø-ka-ndzaf̃ ma nə-rga-w wə-za  
 子供 inf.-食べる neg. 好き-3sg. 3-食べ物  
 子供が食べたくない食べ物

mi-šer phendzokhan wu-nguy to-ka-nə-č̣a-ra-ñ wə-tha  
 昨日 図書館 の-中 pft.(上) -inf.-読む-1sg. の-本  
 昨日私が図書館で読んだ本

ka- はアスペクト標識が現れるときは出現しないことが多い。例えば,

mi-šer ta-ø-ki-ñ wə-tha tə na-p̣ši-ñ.  
 昨日 pft. (上) -ø-買う-1sg. の-本 NP 境界標識 pft.(下) -失う-1sg.  
 私は昨日買った本をなくした。

## 2.2 代名詞

### 2.2.1 人称代名詞

単独で用いられる人称代名詞は以下のとおりである。動詞句の中に人称接辞として現れる形 (2.4.2) と所有表現に現れる人称詞 (2.2.1.1) はいずれも人称代名詞の反映形式である。

	sg.	dl.	pl.
1	n̄a	čhi-gyo (包括形)	yi-gyo (包括形)
		yi-n̄jo (排除形)	yi-n̄o (排除形)
			yo
2	na-gyo	ji-gyo	n̄i-gyo
	n̄a-yo (敬語形)		n̄o
3	wu-yo	wu-yo-jis	wu-gyo-n̄e
	n̄i-yo-n̄e (敬語形)		wu-yo-n̄e
	m̄ə		n̄i-yo-n̄e

yo, n̄o, m̄ə は年配の話し手に限られる。また, n̄a-n̄a はしばしば 1 人称双数 (包括形) として使われるが, これは「あなた+私」という比較的新しい語構成である。

### 2.2.1.1 所有形は次のとおりである。

t̄ə-mo	「母」
n̄a-mo	「私の母」
n̄ə-mo	「あなたのお母さん」
w̄ə-mo	「彼・彼女のお母さん」
ȳə-mo	「我々の母親 (包括形・排除形とも)」
n̄i-mo	「あなた方・彼らのお母さん」
n̄j̄ə-mo	「我々・あなた方・彼ら (いずれも双数) のお母さん」

2.2.1.2 所有の観念を特に強調したいとき, あるいは, 特定の所有者を明確に言明したいときは, 人称代名詞単独形式を前節の形の前に置く。例えば,

t̄ə-pa	「父」
n̄a n̄ə-pa	「私の父」
na n̄ə-pa	「あなたのお父さん」
wu-yo w̄ə-pa	「彼・彼女のお父さん」
yi-gyo ȳə-pa, yo ȳə-pa	「我々の父親」
n̄i-gyo ȳə-pa, yo ȳə-pa	「あなたのお父さん」

wu-yo-ñe ñə-pa	「彼らのお父さん」
čhi-gyo ñjə-pa	「我々2人の父」
ji-gyo ñjə-pa	「あなた方2人のお父さん」
wu-yo-jis ñjə-pa	「彼ら2人のお父さん」

### 2.2.2 指示代名詞

指示代名詞には *štə* 「これ」及び *wətə* 「あれ」が区別される。*štə* は \**šətə* に来源すると思われる。*\*šə-* は「近い」の意。

### 2.2.3 疑問詞

<i>sə</i>	「誰」
<i>thə</i>	「何」
<i>kə-r̥ti</i>	「いつ」
<i>kə-ce</i>	「どこ」
<i>thə-ni</i>	「いかにして」
<i>thə-ste</i>	「いくつ」

## 2.3 形容詞

**2.3.1** 形容詞は *kə-* によってマークされる。*kə-mbro* 「高い」、*kə-mo* 「空っぽである」、*kə-čhem* 「小さい」、*kə-pram* 「白い」など。但し、WT からの借用語には *kə-* は接頭しない。例えば、*ljan-ku* 「緑の」、*sar-pa* 「新しい」など。数詞 (2.6) には *kə-* が接頭する。

*kə-* と語幹の間に異なる接辞が挿入されることがある。例えば *kə-mə-štak* 「冷たい」、*kə-sə-mo* 「悪意ある」、*kə-mə-skru* 「妊娠している」など。これらの接辞は動詞句内部でのそれと同様のふるまいを見せる。2.4.4 参照。

**2.3.2** 形容詞語幹のリデュプリケーション (reduplication) は一般的に「非常に」の意を表す。*kə-kte* 「大きい」に対して *kə-kte-kte* 「大変大きい」、*kə-pram* 「白い」に対して *kə-pra-pram* 「真っ白な」のように。*kə-mə-šta-štak* 「大変寒い」のように、語幹が子音で終わる場合は、重ねられる語幹の第1要素の末子音は脱落する。

2.3.3 ndzok- と stuñ- は kə-+語幹に接頭して比較級と最上級を表す。kə-skren「長い」、ndzok-kə-skren「より長い」、stuñ-kə-skren「最も長い」。

2.3.4 形容詞が名詞を修飾するときは、形容詞は名詞の後に置かれる。me-tok (花) kə-wə-rne (赤い)「赤い花」。

2.3.5 複合形容詞は、名詞句+形容詞、または、動词语幹+形容詞、の語構成をとる。例えば、tə-lto kə-mo「お腹がすいている」は tə-lto「腹」と kə-mo「空っぽである」からなる。

2.3.6 形容詞が述語である場合、そのふるまいは代名詞化とアスペクトに関しては動詞と同様である。{ } 内は基底形である。

kə-mšor	「美しい」
ña mšorñr {ø-mšor-ñ}.	「私は美しい」
na-gyo tə-mšor {tə-mšor-ø}.	「あなたは美しい」
ji-gyo tə-mšor-nč {tə-mšor-nč}.	「あなた方2人は美しい」

## 2.4 動詞句

嘉戎語の文は単文または複文である。単文は1つの VP を含み、その VP は必然的に VPfinal である。複文はいくつかの VPnon-final と1つの VPfinal を含む。一般的にその構造は次のようである。

$[(NP) + VPnon-final]^n(\text{particle}) [(NP) + VPfinal] (\text{aux.}),$

但し、n は 0, 1 または 2。

### 2.4.1 動詞句の構造

以下の記述は主として単文と VPfinal の形態構造を扱う。VPfinal は次のような一般構造を持ち、これが1語をなす。

$VPfinal \rightarrow (ka)-(ke)-P1-P2-(P3)-ROOT-(s)-S1$

但し、括弧内はオプション。

(ka) は一般的に VP の始まりを示す。VPnon-final では義務的に現れるが、VPfinal では義務的でない。

(ke) は P1 との組み合わせで未来または過去を示す。ただ、この言語は基本的にアスペクト言語で、時制の概念はなじまない。未来・過去の意味するところは未完了・完了で表される事象が発話される今よりもより遠い時点であることを示す、ということである。

P1 はアスペクト標識または方向接辞である。

P2 は S1 との組み合わせにより、人称を示す。これらは意味上の動作者、被動作者、ゴール、経験者、受益者などの一致 (agreement) を指定する。

P3 は動作の様態を示す副詞的標識で、他動詞化、動詞化、進行態などを含む。-s は動詞語幹につく派生的接尾辞で、チェイフ (1974) の言う process verb (過程動詞) にのみ現れ、かつ、完了標識でもある。

これらの接辞の出現の順序は規則的である。

#### 2.4.1.1 VP 内における接頭辞の統辞論

接頭辞の順序の規則性の基礎を形成するのはそれら接辞の意味論的機能とクラスである。それらは次のようにまとめることができる。

形態的要素	機能	意味のクラス
ka	VP の始まりの印	VP 信号
ke	アスペクトの強め	アスペクト
P1	完了したか否か または 動作の方向を示す	完了 場所
P2	誰が誰 (何) に	人称
P3	動作の様態	様態指定

#### 2.4.1.2 前接の層

前接辞の機能は表 1 のようであるが、意味のレベルでは表 2 のように解釈できる。

表 1

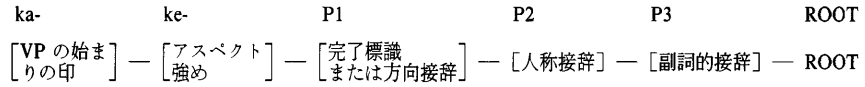
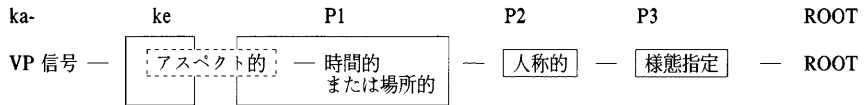


表 2



この並び方から、語幹から離れるほどその意味は抽象的であり、語幹に近いほど具体的であると言える。

#### 2.4.2 アスペクト標識

アスペクト標識は P1 の位置に現れ、動作が完了したか否かを示す。完了している場合 *nə-*、未完了の場合 *ø-* でマークされる。

(1) *ña diñ {ø-dit-ñ}*.

1sg. *ø-*与える-1sg.

私は与えるだろう。

(2) *ña nə-diñ {nə-dit-ñ}*.

1sg. pft.-与える-1sg.

私は与えた。

(3) *ña ñə-mñak ro {ø-ro}*.

1sg. 1sg.-眼 *ø-*覚ます

私は目を覚ます。

(4) *na nə-mñak nə-ros {nə-ro-s}*.

1sg. 1sg.-眼 pft.-覚ます-pft.

私は目を覚ました。

(5) *ñi-gyo tə-rgyap tə-sarñ {ø-tə-sar-ñ} mo ños.*

2pl. (hon.) 結婚 2pl.-結婚する-2pl. interr. aux.

あなた方は結婚しますか？

(6) *ñi-gyo tə-rgyap nət-sarñ {nə-tə-sar-ñ} mo ños.*

2pl. (hon.) 結婚 pft.-2pl.-結婚する-2pl. interr. aux.

あなた方は結婚したんですか？

方向接辞が完了標識 *nə-* の位置に現れ、動作の方向と完了のAspect双方を同時に示すことがある。但し、次の動詞は動作の方向にかかわらず、*nə-* をとる。*khyop* 「(細かく) 切る」、*khak* 「剝ぐ」、*ki* 「借りる、買う」、*krok* 「撮く」、*krot* 「切断する」、*kya* 「繋ぐ」、*mchi lat* 「噛む」、*mzit* 「落ちる」、*phot* 「壊す」、*phis* 「拭く」、*pšit* 「落とす」、*pya* 「持つ」、*sat* 「殺す」、*skyo* 「書く」、*ta* 「脱ぐ」、*yo* 「奪う」。

#### 2.4.2.1 *ke-*

嘉戎語は基本的にAspect言語で、時制は持っていないが、形態素 *ke-* は一般の完了・未完了で表される状態よりも一段遠い状態を示す。フランス語の単純過去と単純未来に近い。

(7) *ña pyañ {ø-pya-ñ}*.

1sg. ø-取る-1sg.

私は(それを)取る。

(8) *ña ke-pyañ {ke-pya-ñ}*.

1sg. tsf.-取る-1sg.

私は(それを)取るだろう。

(9) *na nə-pyaŋ* {*nə-pya-ŋ*}.

1sg. pft.-取る-1sg.

私は(それを)取った。

(10) *na ke-nə-pyaŋ* {*ke-nə-pya-ŋ*}.

1sg. tsf.-pft.-取る-1sg.

私は(それを)取っていた。

### 2.4.3 方向の標識

P1 の位置はアスペクト標識または方向接辞によって占められる。未完了のマークはゼロである。したがって、未完了において動作の方向が示されることはない。未完了で動作の方向を示す必要があるときは VP<sub>final</sub> の前に時を表す副詞を置く。

一方、完了では、さまざまな方向接辞が現れ、動作の方向を示すと同時に、動作が完了していることをも指定する。2.4.2に述べたとおり、本来の完了標識は *nə-* であるが、方向接辞が出現すると *nə-* は現れない。

各方向接辞は直接情報の形と間接情報のそれを区別する。これらは直接見聞したか否かの区別であるとともに、話者の referent に対する心理的近さ・遠さ(近称・遠称)をも反映していると考えられる。間接情報の形態は全て *-a* で終わる。

#### 2.4.3.1 垂直方向の対比

垂直方向について、3つの標識がある。スラッシュの左は直接情報の接辞、右が間接情報のそれである。

山に関して上 *to/ta*

↔ *no/na* 山・川に関して下

川に関して上 *ko/ka*

次の2文は最も単純な対照を示す。

(11) *wu-yo-jis to-thanč* {*to-thar-Nč*}.

3dl. up-行く-3dl.

彼ら2人は山に登った。

(12) wu-yo-jis no-thanč {no-thar-nč}.

3dl. down-行く-3dl.

彼ら2人は山を下りた。

しかし, to- と no- の出現は比較的固定されている。動詞の表す意味から普通「上」を含むものとして, 例えば, rwas「起きる」, mphat「吐く」, kte「大きい, 育つ」などがあるが, これらは多くの場合 to- を伴う。また, 「仕上げる, すっかり……する」の意を含むものも to- を要求する。例えば, si-yok「……し終える」, pka「一杯になる」, pram「乾く」, pa「集める, 作る」など。英語に to eat *up*, to write *up*, to finish *up* などの表現があるが, 同様の意味的事象かと思われる。

方向接辞は意味が中立の動詞にその動作の方向を与えるか, 動詞の意味によって無標の用法が固定しているか, のいずれかの場合が多い。しかし, 特に有標の接辞を置くことによってそのシチュエーションが特定できたり, 特殊な意味を醸成できるなどの興味深い例がある。

(13) na mi-šthis no-pšin {no-pšit-ñ}.

1sg. つば down-つばを吐く-1sg.

私はつばを吐いた。

(14) na mi-šthis to-pšin {to-pšit-ñ}.

1sg. つば up-つばを吐く-1sg.

私はつばを吐いた。

(13) は無標の用法である。つばは普通下へ向かって吐くものだからである。(14) の場合, つばを「上に」吐いた, と言っているのであるが, つばを上にはけば当然つばは自分の顔に落ちる。(14) の意味は「天に向かってつばを吐くような高慢なことをした」「自業自得の結果になった」の意である。

もうひとつ例を挙げよう。

(15) na nə-ngla to-khyen {to-khye-ñ}.

1sg. 私の歩み up-歩く-1sg.

私は歩いた。

(16) *ña ñə-ŋgla no-khyeñ {no-khye-ñ}*.

1sg. 私の-歩み down-歩く-1sg.

私は（一步一步）歩いた。

これは「上に向かって歩く」「下に向かって歩く」の対比ではない。「歩く」の場合、*to-* が前接されるのが無標の表現である。それに対して (16) では *no-*「下に」が前接している。これは歩みそのものにより重大な注意が向けられていることを示唆しており、「一步一步」注意して歩いたことを表している。

「川に関して上・下」という対比も、山に関して見られたのと同様の用法が多いが、*ko-* の場合、「螺旋状に上がる」といったニュアンスを含んでいる。例えば、

(17) *wu-yo-jis ña-ñə-mki kow-ptsirč {ko-wu-ptsir-č}*.

3dl. 私の-頸 coiling up-inv.-ねじる-3dl.

彼らは私の頸をねじり上げた。

(18) *čhi-gyo tə-tak ko-pač {ko-pa-č}*.

1dl. 織ること coiling up-する-1dl.

我々2人は織った。

(19) *ña ti-gi ko-wa-stsheñ {ko-wa-stshe-ñ}*.

1sg. 湯 coiling up-caus.-熱い-1sg.

私は湯を沸かした。

#### 2.4.3.2 水平方向の対比

前・後の対比と上座・下座の対比とがある。

前	ro-/ra	↔	re/ra	後
上座	ku/ka	↔	ni/na	下座

##### 2.4.3.2.1 前・後の対比

次の2文を検討しよう。

(20) wu-yo-ñe ña-ñə-rpak rew-Ntheñ {re-wu-Nthen-ñ}.

3pl. 私の-肩 back-inv.-引く-1sg

(21) wu-yo-ñe ña-ñə-rpak row-Ntheñ {ro-wu-Nthen-ñ}.

3pl. 私の-肩 front-inv.-引く-1sg

訳はいずれも「彼らは私の肩を引いた」であるが、(21)では動作者（彼ら）と話者は向き合っていて、動作者は私の肩を彼らの顔の方へ向けて引いたのである。それに対し、(20)では私は彼らの後ろにいたのであり、彼らは後ろに手を伸ばして私を彼らの背中に向けて引いたのである。このように接辞によって動作者、被動作者の位置関係が予測できる。

次の文も同様に、

(22) štə wu-rni-tə re-dinñ {re-dit-ñ}.

この 赤い-nominalizer back-与える-2pl.

その赤いのを下さい。

商店主は品物を背に座っており、話者は商店主に向かって、商店主の背中側にある赤い（何かの）ものをくれ、と頼んでいる。

#### 2.4.3.2.2 上座・下座の対比

家の内部での客とホスト、年長者と若いものの位置関係は、従前上座と下座という形で具現していた。囲炉裏に関して東側が上座である。ただ、このことはチベット動乱時に亡命したインフォーマントの情報であって、現在もそうであるか否か疑問がある。林（1993）ではこの解釈を採用していない。

#### 2.4.3.3 その他の標識

上記の標識のほか、ne- と yi- という2種がある。ne- は「行って戻ってくる」動きを表す。例えば ne-ya「帰ってゆく」は ne-「戻る」と ya「帰宅する」の複合語である。yi- は一般的移動を示し、「行く」「来る」の類の動詞は、特にその方向を特定する必要のない場合 yi- をとる。例えば、

- (23) **wu-yo yik-thar** {**yi-kə-thar-ø**}      **nos.**  
3sg.    general movement-3sg.-行く    **aux.**  
彼は行った／去った。

よく似ているが、しかし、若干拡張された用法として、**yi-** が「死ぬ」の婉曲な言い方として用いられることがある。

- (24) **no-šis** {**no-ši-s**}.  
**pft.-死ぬ-pft.**  
(彼／彼女は) 死んだ。

- (25) **ñi-šis** {**nə-yi-ši-s**}.  
**pft.-general movement-死ぬ-pft.**  
(彼／彼女は) 亡くなった。

#### 2.4.4 副詞的接辞

P3 の位置は動作の様態を示す副詞的接辞によって占められる。副詞的接辞には、動作の様態を示すもの、進行態を示すもの、他動詞化標識、動詞化標識などが含まれる。「副詞的」というのは Wolfenden (1929) の用語だが、「様態指定的」とか「modal 化」とでもいう方が適当である。但し、他動詞化は様態と言うにすれば文法的過ぎるし、また、進行態は modal にしてはアスペクト的で、いずれにせよあまり適当な命名ではないが。

##### 2.4.4.1 他動詞化標識

前接辞 \*s- は TB 諸語に広く分布する他動詞化標識である。幾つかの改新的言語では \*s- そのものは失われ、声調などに反映されているのみであるが、多くの言語では何らかの形で \*s- の反映形式を保持している。嘉戎語の場合 4 種の他動詞化標識があり、チベット文語の前接辞と平行する部分がある。本節では **sə-**, **šə-**, **rə-**, および **wa-** について記述する。

**2.4.4.1.1 sə-** は最も頻繁に出現する他動詞化標識である。その母音 ə- は動詞語幹の母音に調和し、語幹の母音が front/unrounded のときは [ɛ], low/back/rounded のと

きは [u] として現れる。その他の場合は -ə- である。

典型的な例として次の4つの文を挙げる。

- (26) mi-šer tə-rmi ke-ta-key-dzu {ke-ta-kə-yi-dzu}.  
 昨日 人 tsf.-up (pft.)-3pl.-general movement-集まる  
 昨日人々が集まった。
- (26a) na mi-šer tə-rmi ke-to-sey-dzuñ {ke-to-sə-yi-dzu-ñ}.  
 1sg. 昨日 人 tsf.-up (pft.)-caus.-集まる-1sg.  
 私は昨日人々を集めた。
- (27) štə wu-ṭha wu-ŋguy {wu-ŋgu-y} tə-dok ta-ña-kyo-lo {ta-ña-kyo-lo} no-to.  
 これ の-茶 の-中-に 毒 up (pft.)-mutual act-混ざる aux.  
 このお茶の中に毒が混ざっている。
- (27a) štə wu-smān tə-gi wu-ŋguy {wu-ŋgu-y} tə-sə-kyo-low {tə-sə-kyo-lo-w}.  
 これ の-毒 水 の-中-に 2sg.-caus.-混ざる-2sg.  
 この毒を水の中に混ぜよ。

他動詞構文をさらに使役化する例は以下のとおりである。

- (28) na nə-ŋga ke-nə-taṅ {ke-nə-ta-ñ}.  
 1sg. 私の-着物 tsf.-pft.-脱ぐ-1sg.  
 私は着物を脱いだ。
- (28a) na wu-ŋga ke-nə-sə-taṅ {ke-nə-sə-ta-ñ}.  
 1sg. 彼の-着物 tsf.-pft.-caus.-脱ぐ-1sg.  
 私は彼の着物を脱がせた。

長野 嘉戎語の基本構造

(28b) *nia wu-Nga niə-Nɕi nə-sə-taŋ {nə-sə-ta-ŋ}*.

1sg. 彼の-着物 私の-召使 pft.-caus.-脱ぐ-1sg.

私は召使に彼の着物を脱がせた。

この生産的な *sə-* の他に嘉戎語は動詞語幹の初頭子音の対比（有声 vs. 無声）で自動・他動を区別することがある。例えば、

<i>ka-ŋgyop</i>	燃える	<i>ka-nkyop</i>	燃やす
<i>ka-nbak</i>	裂ける	<i>ka-phak</i>	裂く
<i>ka-ŋglak</i>	褪せる	<i>ka-klak</i>	量かす

2.4.4.1.2 接辞 *šə-* は他動詞化標識であると同時に、「(誰かを) 助けて……させる」の意を表す。次の3文はその例である。

(29) *nia ke-rwas {ke-rwas-ŋ}*.

1sg. tsf.-起きる-1sg.

私は起きるだろう。

(29a) *nia wu-yo ke-sə-rwas {ke-sə-rwas-ŋ}*.

1sg. 3sg. tsf.-caus.-起きる-1sg.

私は彼を起こすだろう。

(29b) *nia wu-yo ke-šə-rwas {ke-šə-rwas-ŋ}*.

1sg. 3sg. tsf.-caus.-起きる-1sg.

私は彼が起きるのを手助けするだろう。

2.4.4.1.3 *rə-* もまた他動詞化標識である。*ka-kšut* 「出てゆく」に対し、*ka-rə-kšut* 「追い出す」、*ka-čhak* 「少ない」に対し、*ka-rə-čhak* 「減らす」など。

2.4.4.1.4 *wa-* は形容詞と名詞を動詞化する。例えば、

- (30) *n̄i-gyo ti-gi ke-wa-stsheñ {ke-wa-stshe-ñ} mo ños.*  
 2pl. 水 tsf.-verbalizer-熱い-2pl. interr. aux.  
 湯を沸かして欲しくない？

- (31) *wa-rgyap gya-roñ na-čhe na-wa-rmow {na-wa-rmo-w}.*  
 彼の-妻 嘉戎 pft.-行く pft.-verbalizer-夢-3sg.  
 彼は妻が嘉戎に行く夢を見た。

#### 2.4.4.2 相互動作の標識

*n̄ə-* は動作が相互的であることを示す。

- (32) *wu-yo-ḡis kew-top {ke-wu-top}.*  
 3dl. tsf.-3dl.-打つ  
 彼ら2人は(誰かを)殴った。

- (32a) *wu-yo-ḡis kew-ñə-top {ke-wu-ñə-top}.*  
 3dl. tsf.-3dl.-mutual act-打つ  
 彼ら2人は殴りあった。

#### 2.4.4.3 反復動作の標識

反復動作は *ra-* または *na-* によって指定される。金鵬 et al. (1957/58) では *na-* の後で語幹が reduplicate されるとあるが、筆者のデータでは必ずしも義務的ではない。

- (33) *ña n̄ə-ra-kroñ {n̄ə-ra-kro-ñ}.*  
 1sg. pft.-repetitive act-掻く-1sg.  
 私は掻いた。

- (34) *štə wa-key ko-ho-ke m̄ə-ma ra-skyoñ {ra-skyo-ñ}.*  
 これ の-より 良い-adverbializer 丁寧な依頼 repetitive act-書く-2pl.  
 これよりも上手に書いてくれませんか？

- (35) štə wu-rmi-yo ke-kə-na-riñ {ke-kə-na-ri-ñ}.  
これ の-男-pl. tsf.-3pl.-repetitive act-笑う-3pl.  
この連中は笑うだろう。

#### 2.4.4.4 自発的 (non-volitional) 動作の標識

動作が自動的・自発的であるか、または意志による統御が不能の場合、mə- が P3 の位置に現れる。

- (36) ña to-mə-mphañ {mphañ-ñ}.  
1sg. up-automatic act-吐く-1sg.  
私は吐いてしまった。

「吐く」という動作は普通意志で統御できないから、無標の発話では mphañ という動詞語幹には mə- が前接する。次の 2 文は mə- の機能を理解する一助となる。

- (37) to-mə-mphañ!  
up-automatic act-吐く  
吐け！

- (37a) to-mphañ!  
up-∅-吐く  
(無理してでも) 吐け！

(37) は意味的に無標であり、mə- が出現している。相手は吐き気を催しているのであり、それに逆らわずに吐け、と言っているのである。それに対し、(37a) には mə- がない。(37a) の示唆する状況は、相手は特に吐き気を催しているのではないが、例えば、話者は相手が何か悪いものを食べたことを知っていて、「口に手を突っ込んででも吐け」と言っているのである。

#### 2.4.4.5 客体化標識

sa- は動詞の表す状況や動作が話者と心理的距離があるか、意図的に心理的距離をおきたいと願っているかのいずれかを示す。例えば、

- (38) *ña-rmo ke-no-sa-pañ {ke-no-sa-pa-ñ}*.  
 あなたの-夢 tsf.-down-objectivizer-作る-2pl.  
 夢を見てください。
- (39) *ña wu-mi ke-no-sa-nə-ñañ {ke-no-sa-nə-ña-ñ}*.  
 1sg. 彼の-娘 tsf.-pft.-objectivizer-愛している-1sg.  
 私は彼の娘を愛していた。

いずれも *sa-* を除外した文がむしろ文法的かつ無標である。(38) (39) は意図的に心理的距離をおこうとするものである。特に (39) は過去の自分の気持ちを客観的に述べようとする表現である。なお, *nə-ña* は単一の語幹である。

#### 2.4.4.6 進行の標識

動作が進行中であることは *nə-* が P3 の位置に現れることによって表される。この形式は完了標識と同一であるが、出現する位置が異なることから混乱は生じない。

- (40) *wu-gyo-ñe ña-mñok wu-dza {wu-dza}*.  
 3pl. 私の-穀物 3pl.-食べる  
 彼らは私の穀物を食べようとしている。
- (41) *wu-gyo-ñe ña-mñok wu-nə-dza {wu-nə-dza}*.  
 3pl. 私の-穀物 3pl.-prog.-食べる  
 彼らは私の穀物を食べている。
- (42) *wu-gyo-ñe ña-mñok tu-dza {to-wu-dza}*.  
 3pl. 私の-穀物 pft.-3pl.-食べる  
 彼らは私の穀物を食べてしまった。
- (43) *yi-ño ñi-gyo nə-mñok no-nə-dzey {no-nə-dza-y}*.  
 1pl. (exc.) 2pl. あなたの-穀物 pft.-prog.-食べる-1pl.  
 我々はあなたの穀物を食べていた。

#### 2.4.4.7 再帰的動作の標識

nə- が P3 の位置に現れて、動作が再帰的であることを示す。進行の標識と同一形式である。例えば、ka-top 「打つ」に対して ka-nə-top 「自身を打つ」、kə-Ngri 「壊れる」に対して kə-nə-Ngri 「自ら崩壊する」(金鵬 et al. 1958: 81) など。ka-nə-nā 「愛する」は現在単一語幹としてふるまうが、-nā だけでも「愛する」を表し得ることから、ここでの nə- は本来再帰標識だったものが語彙化したものと思われる。また、金鵬 et al. (1958) は、ka-ždar に対して ka-nə-ždar はより自動詞性が強調されると述べている。

#### 2.4.5 人称接辞

代名詞化 (pronominalization) は TB 諸語に広く分布する現象で、代名詞またはその代替りの機能を持つ形態が VP において重要な構成要素となっている。「広く分布する」と言ったが、その現れ方は語支によって千差万別である。ロロ・ビルマ諸語は一方の極で、代名詞化現象そのものがほとんどない。他方、嘉戎語、羌語、ヌン諸語、クキ・チン諸語、及び幾つかのヒマラヤ諸語はもうひとつの極をなし、人称代名詞または人称接辞が VP における必須の構成要素になっている。「代名詞化」は一般的には形態論、統辞論、語構成、能格現象などに広く観察される現象で、本来ならば全てを記述すべきであるが、小稿で「代名詞化」という場合、主として VP 内部での動作者、被動作者、ゴール、受益者などの一致 (agreement) を反映する形態的接辞及びそのふるまいを指す。

嘉戎語の人称接辞は P2 と S1 の位置にセットとして現れる。この内、P2 に置かれるそれは歴史的に見ると人称代名詞の形式を反映するものではなく、指示詞に来源を求めうる。これに対し、S1 に置かれるそれは明確に独立の人称代名詞の remnant である。これら人称接辞のパラダイムは自動詞構文と他動詞構文とで大きく異なる。

##### 2.4.5.1 自動詞構文における人称接辞は次のとおりである。

	P2	S1
1sg.	(kə-)	-ñ
1dl.	(kə-)	-č
1pl.	(kə-)	-y
2sg.	tə-	-n

2dl.	tə-	-Nč
2pl.	tə-	-ñ
3sg.	(kə-)	-ø
3dl.	kə-	-ø (または -Nč)
3pl.	kə-	-ø (または -ñ)

S1 に現れる接辞は独立の人称代名詞 (2.2.1) の remnant である。それらはさらに、-ñ (1 人称), -n (2 人称), -č (双数), -y (複数) のように分析できる。3 人称標識はゼロである。P2 に現れる接辞は kə- または tə- である。これらは本来非人称詞起源と思われ, Bauman (1975) が詳細に検証したとおり, kə- は 1 人称の, tə- は 2 人称のカテゴリーを示す指示詞である。嘉戎語では一部 3 人称カテゴリーを示すのに kə- が出現する。この理由はよく分からないが, 北部アッサム諸語の中に 1 人称と 3 人称の人称詞がマージする事実と関係があるかもしれない。

2.4.5.2 他動詞構文における人称接辞

文の中に動作者と被動作者 (またはゴールまたは受益者) が示される場合, 次のようなパラダイムをとる。R は語幹。

		agt.		
ptt./bnf./goa.		1	2	3
1sg.			kəw-R-ñ	wu-R-ñ
1dl.			kəw-R-č	wu-R-č
1pl.		ka-R-y	kəw-R-y	wu-R-y
2sg.		ta-R-n		təw-R-n
2dl.		ta-R-Nč		təw-R-Nč
2pl.		ta-R-ñ		təw-R-ñ

		agt.								
ptt.		1sg.	1dl.	1pl.	2sg.	2dl.	2pl.	3sg.	3dl.	3pl.
3		ø-R-ñ	ø-R-č	ø-R-y	tə-R-n	tə-R-Nč	tə-R-ñ	ø-R-w	wu-R-ø	wu-R-ø

被動作者が1人称と2人称である場合、S1の人称接辞は被動作者に一致する。P2接辞は *kəw-* (2>1), *təw-* (3>2), *ka-* (1>1pl.), *ta-* (1>2), *wu-* (3>1) であるが、これらの基底形式はそれぞれ *kə-wu-*, *tə-wu-*, *kə-a-*, *tə-a-*, 及び *ø-wu-* と考えられる。*kə-* と *tə-* は1人称・2人称カテゴリーを示す非代名詞起源の接辞で、*-wu-* は inverse 標識、*-a-* は direct 標識である (inverse/direct については Van Valin & LaPolla 参照)。したがって、P2 もまた被動作者に一致していることになる。*-wu-* は 2>1, 3>1, 3>2 の一致にのみ現れ、*-a-* は 1>1pl. と 1>2 の一致にのみ出現する。この *-a-* はおそらく方向接辞を名詞化し、かつ、near-deixis のみを意味する ?a (2.1.1) と関係がある。

上記とは対照的に、3人称の被動作者のシリーズではほぼ一貫して一致は動作者に対して起きる。*wu-* は 3dl./3pl.>3 の一致にのみ生起する。3sg.>3 の一致に見られる *-w* は inverse 接辞ではなく、3人称標識である。*-w* や *-u* は第一義的に他動詞構文に現れる3人称範疇を示すマーカーで、TB 諸語に広く分布する。

2.4.5.2.1 もし、被動作者が文に現れない場合、パラダイムは次のとおりになる。

agt.	P2	S1
1sg.	ø-	-ñ
1dl.	ø-	-č
1pl.	ø-	-y
2sg.	tə-	-w (u)
2sl.	tə-	-Nč
2pl.	tə-	-ñ
3sg.	ø-	-w
3dl.	wu-	-ø
3pl.	wu-	-ø

これらの構成要素は3人称被動作者の一致のそれと同一である。2人称動作者のS1になぜ *-w (u)* が立つのかは分からない。

#### 2.4.6 接尾辞 -s

この接尾辞は完了を示すが、他の接辞に比べて生産性は低く、限られた動詞にしか

接尾しない。-s と -d とが相補的分布をなし、一般的に完了語幹とともに生起し得るチベット文語と異なり、嘉戎語の -s は自動の過程動詞（チェイフ）のみにつく。

(44) *wu-yo la-sa-s no-kə-skyes {no-kə-skye-s}*.

3sg. ラサ-abl. pft.-3sg.-生まれる-pft.

彼はラサに生まれた。

(45) *wu-yo-ñe gya-gar-s no-kšis {no-kə-ši-s}*.

3pl. インド-loc. pft.-3pl.-死ぬ-pft.

彼らは（インドへ行き）死んだ。

仮に (44) の「主語」が1人称単数であったら、VP は *no-skye-ñ*、また、仮に (45) のそれが1人称複数であったなら、VP は *ñap-ši-y* となる。このことは人称接辞の方が接尾辞 -s よりも高いランクにあることを示すものである。

助動詞の一部、例えば、*kə-ra*「必要である」、*ndo*「ある、存在する」、*kə-khya*「できる」、*kə-sa-kha*「困難である」などは完了において -s をとりうる。例えば、*ña ka-che no-ra*「私は行かねばならない」に対し、*ña ka-che no-ra-s*「私は行かねばならなかった」。

#### 2.4.7 前接辞の語彙化

嘉戎語は複雑な VPfinal 構造を持ち、多くの接辞が規則的かつ生産的に機能することを見てきた。また、その規則性と生産性が特定の動詞と特定の接辞の間にある意味と連関していることを見つけた。そのような過程においてある接辞はその母音要素を落とし、あたかも語幹の一部のようにふるまうようになっているものがある。また、その逆に、意味を明確化するため、語彙化した接辞に母音を挿入して脱語彙化したり、接辞を語彙化した語幹の前にさらに別の接辞をつける過程も見られる。この接辞の母音要素の消滅と挿入との過程は嘉戎語が長い間に何回か経験した歴史的变化であり、TB 諸語に共通して起こったであろうプロセスと平行すると思われる。以下に掲げる例は卓克基方言で語幹として対立する自動詞と他動詞であるが、それ以外の方言では、ハイフンの前に母音が挿入され、接辞が生産性を回復しつつあるか、2.4.4.1.1に見た *sə-* のような生産的な接辞がより積極的に用いられるようになってきている。

「変える」	s-gyur	「変わる」	n-gyur
「廻す」	s-kor	「廻る」	n-kor
「巻く」	s-kru	「巻かれた状態になる」	n-kru
「見せる」	s-rong	「見える」	ø-rong
「貸す」	s-ki	「借りる」	ø-ki
「起こす」	r-was	「起きる」	ø-was
「会見する」	m-to	「会う」	r-to

## 2.5 助動詞

頻度の高い助動詞として、ka-khya「できる」、ka-špa「できる」、khut「かもしれない、用意ができていない」、ra「必要である」、ka-yok「……してよい」、ka-sə-yok「……し終わる」、ndo「ある、存在している」などがある。これらは通常動詞不定形を要求する。

(46) ña junjak ka-pa khyañ {khyā-ñ}.

1sg. 泳ぎ すること できる-1sg.

私は泳げる。

(47) ña ku-ru-skat ka-pa špañ {špa-ñ}.

1sg. チベット-言語 すること できる-1sg.

私はチベット語が話せる。

(48) tə-gyim ka-ñi ma nə-khut.

その-家 住むこと neg. 用意ができていない

その家は住む状態にはなっていない。

(49) ña tə-gyim wu-nguy ka-ngo mə yok.

1sg. その-家 の-中に 入ること interr. してよい

家に入ってもいいですか？

- (50) semdə ka-pa ma ra.  
 心配 すること neg. 必要だ  
 心配する必要はない。
- (51) nəgyo ka-nə-ndza mə tə-sə-yok.  
 2sg. 食 べ る 事 こと interr. 2sg.-終 える  
 食 べ 終 え ま し た か ？
- (52) nəgyo chamdo-y ka-che mə no-ndo-s.  
 2sg. チャムド-loc. 行 く 事 こと interr. pft.-あ る -pft.  
 チャムドへ行ったことがありますか？

これらの助動詞のほか、陳述の助動詞 *nos* (肯定形) と *mak* (否定形)、存在の助動詞 *ndo* (肯定形) と *me* (否定形) がある。それらは主動詞になりうるほか、助動詞としても機能する。

- (53) so-sni tə-mu no-lat je-lat ji, na ka-che nos.  
 明日 雨 降 る 降 ら な い ま た, 1sg. 行 く aux.  
 明日雨が降っても降らなくても、私は行く。

(53) において、*nos* を削除し、*na ka-chen* {*ka-che-n*} とすることも文法的である。

存在の助動詞 *ndo* の代わりにアスペクト標識 +*to* (多くの場合 *no-to*) が用いられることもある。この場合、人称接辞は出現しない。

## 2.6 数詞

### 2.6.1 基本的数詞は次のとおりである。

1	kə-rek
2	kə-ñes
3	kə-sam

長野 嘉戎語の基本構造

4	kə-wdi
5	kə-mño
6	kə-ʈok
7	kə-šñes
8	wə-ryat
9	kə-ŋgu
10	sgye
11	sgye rek
12	sgye ñes
20	kə-ñes sgye
22	kə-ñes sgye kə-ñes
100	pə-rya
1000	stoñ-tso

2.6.2 序数はチベット文語からの借用である。

	Gyarong	WT
「第1の」	tañ-bo	dang po
「第2の」	ñes-pa	gnyis pa
「第3の」	səm-ba	gsum pa
「第4の」	bžə-ba	bzhi pa
「第5の」	rña-pa	lŋa pa
「第6の」	ʈək-pa	drug pa
「第7の」	bdən-ba	bdun pa
「第8の」	rjat-pa	brgyad pa
「第9の」	rgu-ba	dgu pa
「第10の」	pčü-pa	bcu pa

月の名は序数を要求する。例えば、2月は zla-wa ñes-pa「月 第2の」。ちなみに、「2ヶ月」は kə-ñes tsə-la である。

2.6.3 tə-lok は「～倍」を表す。例えば、kə-sam tə-lok「3倍」。

2.6.4 分数は *tə-šok* により表される。 *sgye tə-šok wu-ŋguy kə-sam tə-šok* 「10分の3」。

2.6.5 類別詞は比較的豊富である。例えば, *phyar* 「1枚の紙, 皮など」, *rgi* 「1片の, 1粒の」, *lpek* 「1片の肉, 1枚の布」, *pyam* 「1揃いの着物」, *rzək* 「1束の」, *nthak* 「1粒の液体」。

## 2.7 格助詞

本来嘉戎語には格を標示する助詞はなかったと考えられる。込み入った, しかし, 洗練された代名詞化の体系によって助詞の役割は十分果たされていたからである。後になって, 特にチベット語との接触に伴い, 幾つかの助詞を発達させてきた。嘉戎語には2つの場所格助詞, 1つの具格助詞, 1つの属格助詞, それに1つの能格助詞がある。

2.7.1 *-y(i)* は最も一般的な場所格助詞である。

- (54) *bi-sni-so pot-pa wu-tha tseng-du-y par wu-nə-lat.*  
 昨日-明日-日 チベット の-本 成都-loc. 写真 3pl.-prog.-打つ  
 昨今チベット語の本は成都で印刷されている。

*-y(i)* のもうひとつの機能は動詞不定形について「……するために」の意を表すことである。

- (55) *nia tə-tha kə-ki-y (kə-) čheñ {kə-čhe-ñ}.*  
 1sg. 本 買うこと-loc. (1sg.-) 行く-1sg.  
 私は本を買いに行く。

2.7.2 *-s* はもうひとつの場所格助詞である。*-y(i)* が一般的な場所を示すのに対し, *-s* は静的なニュアンスまたは動作の「もと」になっている場所を表す。

(56) *wu-yo la-sa-s no-kə-skyes {no-kə-skye-s}*.

3sg. ラサ-loc. pft.-3sg.-生まれる-pft.

彼はラサに生まれた。

**2.7.3** *-s* はまた奪格及び具格助詞でもある。これは能格助詞 *ki-* (2.7.5) と相補的分布をなし、先行する音節が母音で終わるときに *-s*、子音で終わるとき *-ki* が現れる。

(57) *na kyo-mkyo-s nə-pan {nə-pa-ñ}*.

1sg. キ ヨ ム キ ヨ (脚木足)-から pft.-来る-1sg.

私はキ ヨ ム キ ヨ から来た。

(58) *kə-zor wə-yi-s*,

痛い の-理由 (原因)-から (によって)

痛いことにより

**2.7.4** 属格助詞は *-i* である。これはチベット文語からの借用と思われる。

(59) *wu-tə-ñ nə-yo-i nos*.

あれ-pl. 2sg. (hon.)-gen. aux.

あれはあなたのです。

**2.7.5** 能格標識は *-ki* である。これも WT (*-kyis*など) からの借用である。VP 内部での人称接辞の一致によって嘉戎語の能格現象は完結している。論理上、能格助詞 *-ki* と *inverse* 標識 *wu* は共起しうるはずであるが、実際は *wu* が現れないときのみ *-ki* が生起する。そして、他動詞文の動作者が *-ki* を伴わない文も許される。これらのことから、嘉戎語における能格の分裂は文法上の問題と言うよりはむしろディスコースの問題と考える方がよい。

(60) *štə wu-rmi-tə-ki štə wu-dzat na-nə-mšor*.

これ の-男-その-erg. これ の-女 pft.-prog.-愛する

この男がこの女を愛していた。

WTと同様、この -ki は具格をも表し得る (2.7.3)。

## 2.8 否定と疑問の標識

否定は ma-, 疑問は mo- によって表される。両者とも VPfinal, VPnon-final または助動詞の前に置かれる。

## 3 おわりに

レファランスマスターを目指す第一歩として、筆者の記述資料をもとに矛盾なく説明を施せる限りにおいて、嘉戎語文法の骨格を示した。諸賢の御指正を待ちたい。また、記述資料不足から接辞の hypotaxis/parataxis の問題など、十分な解釈を示せなかった部分については、今後補ってゆきたい。

### [略号表]

agt.	agent
aux.	auxiliary verb
bnf.	beneficiary
caus.	causative
dl.	dual
erg.	ergative marker
exc.	exclusive
gen.	genitive
goa.	goal
hon.	honorifics
incl.	inclusive
inf.	infinitive
interr.	interrogative
inv.	inverse prefix
loc.	locative
neg.	negative/negation
nom.	nominalizer

長野 嘉戎語の基本構造

NP	noun phrase
pft.	perfective
pl.	plural
prog.	progressive
ptt.	patient
sg.	singular
tsf.	tensifier
VP	verb phrase
WT	Written Tibetan

## 謝 辞

小稿は文部省科学研究費補助金国際学術研究『ジャンシュン語の再構成と文語チベット語成立過程の研究』（代表者：長野泰彦）、文部省特定領域研究『環太平洋の消滅の危機に瀕した言語の緊急調査研究』（代表者：宮岡伯人）及び国立民族学博物館の共同研究『ボン教文化の総合的研究』の成果の一部である。

また、G. Thurgood（カリフォルニア州立大学フレズノ校）、R. J. LaPolla（香港城市大学）、崎山理（滋賀県立大学）、藪司郎（大阪外国語大学）、加藤昌彦（大阪外国語大学）5氏から貴重なコメントをいただき、それをもとに加筆修正することができた。深甚の謝意を表する。

## 文 献

Bauman, James J.

1975 *Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman*. Ph. D. 論文（カリフォルニア大学）。

チェイフ, W.

1974 『意味と言語構造』東京：大修館。

Chang Kun and Betty S. Chang

1975 Gyarong historical phonology. *BIHP* 46-3, 391-524.

DeLancey, Scott

1981 An interpretation of split ergativity and related patterns. *Language* 57 (3), 626-657.

Driem, George van

1993 The Proto-Tibeto-Burman verbal agreement system. *BSOAS* 56 (2), 292-334.

1995 Black mountain conjugational morphology, Proto-Tibeto-Burman morphosyntax, and the linguistic position of Chinese. In Y. Nishi, J. A. Matisoff and Y. Nagano (eds) *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax* (Senri Ethnological Studies 41), pp. 229-260. Osaka: National Museum of Ethnology.

Kin P'eng (金鵬)

1949 Étude sur le Jyarung. *Han Hiue* 3, 211-310.

金 鵬 et al.

1957/58 「嘉戎語梭磨話の語音和形態」『語言研究』2, 123-151; 3, 71-108.

- LaPolla, Randy J.  
 1992 On the dating and nature of verb agreement in Tibeto-Burman. *BSOAS* 55 (2), 298–315.  
 1995 ‘Ergative marking’ in Tibeto-Burman. In Y. Nishi, J. A. Matisoff and Y. Nagano (eds) *New Horizons in Tibeto-Burman Morphosyntax* (Senri Ethnological Studies 41), pp. 189–228. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 林 向荣  
 1993 『嘉戎語研究』 成都：四川民族出版社。
- Nagano, Yasuhiko  
 1984 *A Historical Study of the rGyarong Verb System*. 東京：菁柿堂。  
 n.d. Gyarong. In G. Thurgood and R. J. LaPolla (eds) *Sino-Tibetan Languages*. London: Curzon (in press).
- 長野 泰彦  
 1990 「ギャロン語」『言語学大辞典』第1巻, pp. 1385–1390. 東京：三省堂。
- 瞿 霽堂  
 1984 「嘉戎語概況」『民族語文』2, 67–80。
- Van Valin, R. and Randy J. LaPolla  
 1997 *Syntax*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wolfenden, Stuart N.  
 1929 *Outlines of Tibeto-Burman Linguistic Morphology*. London: Royal Asiatic Society.  
 1936 Notes on the Jyarong dialect of Eastern Tibet. *T’oung Pao* 32, 167–204.